

# 潟環境研究所 ニュースレター

Wetland Environment Research Laboratory, City of Niigata

第 5 号 2016年7月  
新潟市

潟と人とのより良い関係を探求し、  
潟の魅力と価値を再発見・再構築。



「ジョレンを使ってドロ揚げ」佐潟クリーン活動より

・消えた鎧潟……………	P. 2
・鎧潟干拓地に眠る水生植物……………	P. 3
・福島潟の現状と課題……………	P. 4
・水辺の怪異……………	P. 6
・柳丸が探る!にいがた「潟」伝説・アンナ隊長「潟を食べる!」…	P. 7
・潟のエッセイ……………	P. 8

佐潟はことし、ラムサール条約登録20周年を迎えました。今号では、佐潟のほとりに位置する赤塚中学校の生徒からお送りいただいた、佐潟との関わりについての作文をご紹介します！

## 「命を守る」 山本 遥久翔 白鳥環境愛護委員長



私は白鳥環境愛護委員会を3年間やってきて、自然とふれあう活動にとてもやりがいを感じています。

そして、県の愛鳥モデル校に指定されている赤塚中学校でなければできない活動なので、とても誇りに思います。

昭和36年、当時の科学クラブの先輩たちが、ケガをして保護された白鳥「オゼット1号」を世話し、その翌年には佐潟で保護された「シベリア太郎」を世話したと聞いています。

それから数えて27代目になる、平成24年に県愛鳥センターに保護された2羽の白鳥「らい」と「そう」を、現在12名の委員で世話しています。

冬には、白鳥の飛来数調査も行っていますが、普段の池掃除や餌やりなど、命にもかかわる重大な活動を、みんなと協力して行ったときは、特に達成感を味わうことができます。

この活動を通して、前よりも命を守る責任の重大さを感じるようになりました。



白鳥小屋の清掃活動

## 「佐潟と共に」 沼倉 泰平 生徒会長



赤塚中学校では、佐潟クリーン活動という取り組みを行っています。佐潟クリーン活動とは葦刈りや泥上げ、ゴミ拾い等をして美しい佐潟を守っていこうという活動です。しかし、私は佐潟をきれいにすることだけがこの活動の目的だとは思っていません。身近にあり過ぎるため、当たり前のように見えていた佐潟の良さや自然の豊かさを再認識できる機会でもあると思っています。

私は中学校の3年間、小学校も含めると9年間ずっと佐潟に関わって来ました。そんな中で思った事があります。それは赤塚に住む人々と佐潟は共に生き、助け合ってきたんだということです。私たちは潟普請やクリーン活動などの奉仕活動を行っていますが、佐潟からも様々な恩恵を受け暮らしています。佐潟が昔からきれいなのはこの持ちつ持たれつのあるからだと思います。

私は学校から見る佐潟の風景が大好きです。そんな美しい風景を維持していくためにこれからも佐潟と共に歩んでいこうと思います。



クリーン活動での葦刈り

※ 市では、今年、佐潟のラムサール条約登録20周年を記念する事業を予定しています。今後、市報やホームページなどでお知らせします。



越後平野は信濃川・阿賀野川などの堆積活動によって造成された沖積平野である。海岸線は村上から弥彦・角田山地まで弓の弦のように張り出している。距離にして約100キロメートルである。この海岸線に沿うように砂丘列が発達、海と平野を分断する働きをしている。河口の出口は砂丘列によって遮られ、砂丘列の内陸側には湿地帯が形成され、潟湖が成立する要因となっている。

潟湖の誕生には断層活動も重要である。西蒲原地域は長岡平野西縁断層帯の活動に伴う沈降活動で成立した潟湖が多い。例えば鑑潟の潟底付近から発見された大島橋遺跡は7～8世紀の遺物が検出されている。7～8世紀、鑑潟の潟底周辺は地表に在り、その後の地震活動などで沈降し、潟が成立したものと考えられる。このような状況は考古学上の調査活動の進展に伴い越後平野各地で報告されている。例えば、紫雲寺潟(塩津潟)の青田遺跡(縄文時代晩期)もその例である。

「北国は水国なり、西北は海、東南は山勢、その間は弥彦、米山を除いて平地、川脈縦横し、池沢星の如し、その中で最大の湖沼は鑑湖(鑑潟)である。周囲は十有余里…」と橘崑崙こんろんは『北越奇談』で伝えている。文化8(1811)年頃の越後平野の様子をあますところなく伝えている。この一文からも越後平野は広大で湖沼が数多存在する様子が理解できる。湖沼名も鑑潟・福島潟・塩津

	春	夏	秋	冬	
漁業(コイ、フナなど)	■				
サケ漁			■		
植物性食料(ハス、マコモほか)	■		■		
ヒシ取り		■			
鳥類				■	
ヨシ、マコモ取り			■		
米作、畑作	■				

表1 鑑潟周辺の生業暦

潟・佐潟・大潟・田潟・楊枝潟・鳥屋野潟などがあげられている。ここに挙げた潟のうち、福島潟・佐潟・鳥屋野潟を除けば他の全ての潟は干拓されている。干拓は江戸時代後半から徐々に進められ、現在に至っている。干拓地の大部分は水田となった。近年は商工業地・宅地への転換が行われているところもある。

低湿地は農作業の困難さに加え、無数の動植物が繁茂・生息する無気味さ、健康上の問題などマイナスイメージが強い。しかし、それとは逆に潟湖は自然の恩恵を享受できる場所として、潟と共に生き、寄り添う人々もいたのである。鑑

潟・遠藤集落はその例である。鑑潟は面積約300ヘクタール、周囲約9キロメートル、水深約150センチメートルであった(『潟東村誌』)。干拓事業は昭和33(1958)年に開始され、昭和41(1966)年に完成する。

低湿地の広がる西蒲原地域は米作中心の農業経営が行われている。干拓前、鑑潟の北東に位置する遠藤集落は漁業が主、米作を従とする経営があり、漁業協同組合も存在した。春夏秋冬、米作と狩猟・漁労・採集を組み合わせ、生活が営まれていた(表1)。栽培した米・野菜以外は自然の恵みを貰い受けていた。春～秋は鮒・鯉・どじょうなどの魚類、湖面に浮かぶ菱、蓮、マコモなどの採集、冬は鴨猟、鯉・鮒などを捕獲していた。漁法はスタテ・カブセ網・刺し網などが行われていた(図1)。冰雪期にはガチボイを行った。ガチボイは氷の上を楳で叩き魚を追い込む漁法である。狩猟は主に鉄砲を利用した他、水面にモチを塗付したアケビ、藤蔓を流し鴨を捕獲した。水田からは建築用材、薬草なども入手していた。水面及び水路は輸送手段の船道としても重要であった。

また、狩猟・漁労活動は男性、採集活動が女性と性差による労働の役割分担が明確であった。女性は採集活動だけではなく、家事全般の他、魚・菱の実の販売を近郷近在に行っていた。文字通り寸暇を惜しんでの生活であった。収入は中規模の農家と同程度であったと伝えられている。

「西に弥彦・角田の霊峰、東に滔々つきぬ信濃川、間に平和な漁村とて人に知られた名勝地、此処に名高き鑑潟…」と唄いながら、毎日、鑑潟の漁に出る遠藤の渡辺国松さん(明治43(1910)年生まれ)が居た。渡辺さんが口ずさむ鑑潟は当時、魚が群れ、鳥が舞い、水辺は各種の生き物を育み、自然を浄化していた。今、その水辺は消え、美田に変貌している。

科学技術の進歩は格段に生活を改善した。一方で動植物を育んだ自然は失われた。各種の生き物を育む豊かな水辺空間に身を委ね、心地よい涼風を感じたいと願う人々がまだ、暮らしている。消えた鑑潟の傍らで…。



図1 スタテ漁(画・星野五郎)



写真集「ありし日の鑑潟(古俣近建)」より

※潟東歴史民俗資料館では鑑潟に関する民俗資料や写真が展示してあります。ぜひ訪れてみてください。



土の中で眠っている植物の種

田んぼや畑の土には、たくさんの植物の種が眠っています。このように、土の中で眠っている種のことを「埋土種子」といいます。埋土種子は、光や温度などの刺激を与え、適した環境になると眠りから覚め、発芽することがあります。この埋土種子を地表に撒き出すことによって、絶滅の危機に瀕している植物種を復活させたり、植生を復元させたりする事例が数多く知られています。



埋土種子が発芽した様子

越後平野に存在している水生植物の埋土種子

低湿地や湖沼沿岸に生育している水生・湿生植物は、たくさんの生き物たちのすみかやえさ場になっています。

また、水生植物は、水中の有機物を分解し、水を浄化する働きも持っているため、湖沼の水環境や生態系を維持する上で、重要な存在です。

しかし近年、耕地整理や干拓による生育環境の減少や、水質の悪化などにより、全国的に水生植物は減少傾向にあります。

越後平野には、広い水生植物帯を有する福島澗、鳥屋野澗、佐澗といった数々の湖沼がありますが、かつてはもっとたくさんの湖沼がいたるところにありました。その多くは干拓されましたが、土の中には、まだ多くの発芽能力を持つ水生植物の埋土種子が残っている可能性があり、干拓地の土を使って、失われた水生植物帯を復元できるかもしれません。

鎧澗の水生植物

干拓された湖沼の一つに、鎧澗があります。鎧澗は、昭和41（1966）年まで越後平野に存在した湖沼です。旧西蒲原郡（現新潟市西蒲区）のほぼ中央に位置し、昭和30年代には面積約270ヘクタールという、福島澗に匹敵する広さの湖沼でした（「西蒲原土地改良史 下巻」、「新・新潟歴史双書 4 内野新川」）。現在、鎧澗干拓地には乾田化された、広い水田地帯が広がっています。鎧澗は古くから、農業用水、漁場、猟場として利用され、また、ハス、ヒシ、ジュンサイ、クワイ、マコモ、ヨシといった水生植物が豊富に採集されてきました。

干拓前に植物調査をした文献や標本を調べてみたところ、1946年～1967年に確認、採集された水生植物は計72種となり、非常に高い水生植物の多様性が維持されていたことが、明らかになりました。



鎧澗クリーンセンターから新潟県道380号今井巻線へ向かう農道。正面右側には角田山、左側には多宝山が見える。かつてこの一帯が鎧澗だった。

今も残る水生植物

現在、新潟大学教育学部志賀隆准教授とともに、越後平野における埋土種子を用いた植生復元の可能性について検討を行っています。

そこで、鎧澗干拓地を調査地として、計20か所の調査地点の土を所有者の方からいただき、埋土種子の構成種を把握するための土の撒き出し試験を実施しています。鎧澗は干拓後、約50年しか経っていないため、鎧澗が存在した当時の植物の種子が、まだ生きている可能性があります。

平成27（2015）年に、鎧澗干拓地の水田の周りや水路を歩き、現在の水生植物の生育状況を調べてみました。すると、16種の水生植物（このうち、5種は絶滅危惧種）を確認することができました。これは、これらの種の種子供給源と、生育に適した環境が、今も部分的に維持されていることを示しています。種子の供給源は水田の土と考えられ、土と共に水路に種子が流れ込み、水生植物の群落が作られたと考えられます。

今後、水田の土を撒き出すことによって、過去存在し、現在確認されなかった種が確認されるかもしれません。どんな植物が出てくるか、楽しみです。



水路で確認されたミズオオバコ（写真上）とトチカガミ（写真下）。両種とも絶滅危惧種である。



**I. 20年間の自然環境の変化**

1997年「水の駅ビュー福島潟」(以下、ビューとする)が開館して、来年は20年となる。開館以来、NPO法人なっとわーく福島潟の事務局員として、また、指定管理を委託されて、ビューの職員として、福島潟の自然の変化を感覚的に漠然と捉えてきた。その中でもいくつかは望ましい変化もあるが、多くは潟環境保全にとって危惧を感じるようなものである。それらのいくつかを挙げることによって、今後の福島潟の保全について考えてみたい。

**(1) 潟の中の島(中州)の面積の減少と水面の拡大**



カラーの図は1997年ビューができる1年前の航空写真にもとづき、作成した福島潟ガイドマップである(図1)。陸地と水面の割合の様子がよくわかる。1998年から2005年、2009年の航空写真をもとに潟内の陸地の面積を比較したのが、表1である。1998年の潟内の陸地の面積を100とすると、2009年には、約54%に減っている。



表1 航空写真からみた陸地面積の比較

年	5mm×5mmの方眼数	図上のcm <sup>2</sup>	比較(%)	方眼を満たしたところの実面積換算(m <sup>2</sup> )
1998	472	118	100	436203.52
2005	392	98	83.05	362270.72
2009	255	63.75	54.03	235660.8

図1 ガイドマップ「潟の野遊び」より

**(2) 潟のヨシ・マコモ群落など抽水植物の衰退**

潟の中のマコモ群落ならびにヨシ群落の経年変化を航空写真で解析を試みた。植相の境界の判別が難しく明確に衰退していることを把握できなかったが、漁協の組合員や、潟舟の会員への聞き取り調査では、ヨシ、マコモの群落の衰退が明らかであった。原因の一部には、オオヒシクイや白鳥が首を伸ばして、マコモやヨシの地下茎を食べることもあるが、島自体の浸食により陸地の水際に生えるこれらの植物自体が島の面積の減少により、群落が衰退していると考えられる。

**(3) 潟の柳の木減少**

かつて潟の中の水路ごとの漁業権やヨシ刈りの権利の境界の目印に植えられた柳の木が、近年減少の一途をたどっている。柳の木のある潟風景は福島潟の魅力ともなっていた。減少の原因の一部は、島の浸食により水際にあった柳の木が倒れたこと、カワウなどの糞害により、木が枯れたことなどがあげられる。しかし、その他の原因としては、毎年行われている潟全面のヨシ焼きも挙げられる。

**(4) 浮葉植物オニビシの大増殖、ガガブタ群落の復活**

潟カメラを設置している潟中央部、ならびに松岡川の流入口から潟の中央水路にかけてオニビシが大繁殖しており、潟舟の進行をも妨げるような状態である。オニビシの大繁殖は、かつて人が食していた在来種ホンビシ(ヒシ)を追いやり、新潟市絶滅危惧Ⅰ類のヒメビシの生存も脅かしている。

反面、潟内に殆ど見られなかった新潟市絶滅危惧Ⅰ類のガガブタが2015年夏ごろから、潟の内部と放水路の雁かけ橋付近に大繁殖をしている。

**(5) 水質の変化1998~2015**

福島潟の水質については、新潟市が毎年1回調査をしている。図2は、福島潟の流出河川新井郷川の潟口橋のBODの経年変化である。いずれの年も環境基準以下であり、大きな変化はなく、良好である。

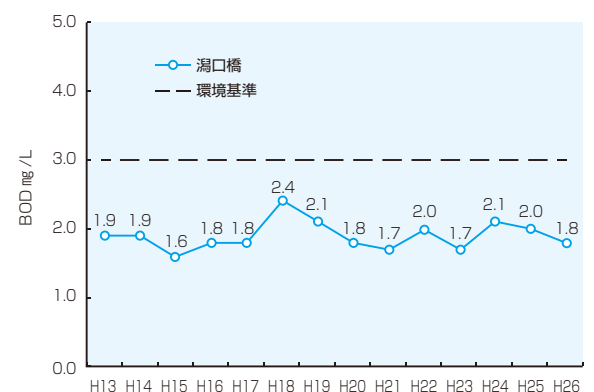


図2 潟口橋のBODの経年変化(「平成27年度 新潟市の環境」より)

表2は、ねっとわーく福島潟が1998年から毎年実施してきた水質調査の結果である。毎年の結果はねっとわーく福島潟活動報告集1～18号に記録してきたものである。(18号は未刊)

表2 福島潟の水質の経年変化(ねっとわーく福島潟の調査から)

水質項目	98	99	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
万十郎川COD[mg-O/L]	4.00	3.20	4.80	4.00	4.00	4.00	15.00	6.00	4.00	8.00	5.30	8.00	10.00	10.00	4.80	7.30	3.30	8.20
万十郎川亜硝酸態窒素[mg-N/L]	0.010	0.013	0.040	0.010	0.012	0.012	0.020	0.020	0.050	0.050	0.009	0.050	0.020	0.020	0.012	0.011	0.012	0.012
万十郎川オルトリン酸態窒素[mg-P/L]	0.2	0.1	0.05	0.06	0.06	0.07	0.2	0.2	0.1	0.2	0.1076	0.2	0.2	0.2	0.054	0.120	0.068	0.013
万十郎川 電気伝導度[μS/cm]	80.0	82.9	85.8			90.0	91.0	53.7	82.7	69.0	86.0	86.0	85.0	119.0	114.0		90.0	76.1
荒川川 電気伝導度[μS/cm]	105	82.5	84.5				76.0	58.0	95.9	86	94	108	88	107	68.5		60	125
潟口橋 電気伝導度[μS/cm]	150	135	145				114.5	102.5	14.7	106.5	103	107	114		116		119	99.9

### (6) 流入13河川の魚類相の経年変化

表3は、福島潟13流入河川で確認(調査はねっとわーく福島潟が毎年行ってきた)できた魚類である。1998年から2015年の間、13の流入河川の魚種の変化はほとんどみられない。強いて挙げれば、本来南西日本に多いツチフキが2000年以降、カネヒラが2007年以降見られるようになったことなどである。魚類相の調査時に、甲殻類の調査も行ってきたが、2013年以降、かつて潟で漁を行ってきた、スジエビ、ヌカエビが復活し、趣味で漁を行っている潟の漁師によると、スジエビがここ2～3年の間、相当の量になるとのことである。

### (7) 外来生物の増加

外来植物セイタカアワダチソウの侵入により潟ならびに潟周辺の在来植物が駆逐されている。その他、外来生物ではないが、カナムグラもヨシに巻き付きヨシ群落が脅かされている。またアメリカネナシカズラも園地のあちこちにみられるが、見つけ次第駆除している。

動物では、特に放水路で、ブラックバス、ブルーギルの増加がみられる。またミシシッピーアカミミガメが増加し潟周辺で繁殖している。クサガメが減少し、ニホンイシガメがほとんど見られなくなった。

表3 福島潟13河川で確認した魚類

表中に確認のないゲンゴロウブナとソウギョは、潟の中で網にかかったもの。ヤマメは、冬季に本田川で確認したものである。(ねっとわーく福島潟調査から)

No.	科名	種名	生活史	新潟市RD	確認年															
					98	99	0	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
1	ヤツメウナギ	スナヤツメ	純淡水魚	VU	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
2	コイ	コイ	純淡水魚				○	○			○	○	○				○	○	○	
3		ゲンゴロウブナ	純淡水魚																○	
4		ギンブナ	純淡水魚				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
5		ヤリタナゴ	純淡水魚	NT	○			○	○			○	○						○	
6		カネヒラ	純淡水魚									○	○	○	○	○	○	○	○	
7		キタノアカヒレタビラ	純淡水魚	NT		○		○	○		○	○	○		○					
8		タイリクバラタナゴ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
9		ハス	純淡水魚			○		○											○	
10		オイカワ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
11		ソウギョ	純淡水魚																	
12		アブラハヤ	純淡水魚	LP	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
13		ウケクチウグイ	純淡水魚	NT				○	○				○							
14		ウグイ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
15		モツゴ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
16		ビワヒガイ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
17		タモロコ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
18		カマツカ	純淡水魚			○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
19		ツチフキ	純淡水魚				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
20		ニゴイ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
21	ドジョウ	ドジョウ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
22		シマドジョウ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
23		ホトケドジョウ	純淡水魚	VU											○					
24	ギギ	ギギ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
25	ナマス	ナマス	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
26	アカザ	アカザ	純淡水魚	NT															○	
27	サケ	ヤマメ	遼河回遊魚	NT																
28	メダカ	キタノメダカ	純淡水魚	NT	○	○	○	○	○		○									
29	カジカ	カジカ大卵型	純淡水魚	NT		○								○	○	○	○			
30	サンフィッシュ	ブルーギル	純淡水魚																	
31		オクチバス	純淡水魚							○							○			
32		コクチバス	純淡水魚								○									
33	ハゼ	ウキゴリ	両側回遊魚										○	○	○	○				
34		ジュズカケハゼ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
35		トウヨシノボリ	純淡水魚			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
36		ヌマチチブ	純淡水魚									○								
37	タイワンドジョウ	カムルチー	純淡水魚						○	○	○	○	○				○	○	○	
		計				20	19	19	25	22	22	24	24	25	20	21	22	18	16	16

## II. 福島潟の未来への展望

### (1) 旧来の潟の中の<sup>しゅんせつ</sup>浚渫は、主要水路のみにとどめ、しばらく様子を見る必要がある。

新しく水田から、潟に戻す地域の浚渫は、全面を平らに浚渫するのではなく、凹凸のある環境(水面と島がある環境)にし、ヨシ、マコモの生える緩衝帯をのこすべきである。

### (2) ヨシ焼きは、潟の中全面を焼くのではなく、部分的に焼くか、数年に1回あるいは5年に1回程度にとどめ、しばらく様子を見る必要がある。

### (3) 従来からある「福島潟環境保全連絡協議会」は、現在のところ「福島潟クリーン作戦」と「ヨシ焼き」の行事を主催しているが、福島潟の環境保全の将来像を描く連絡会等を新潟市の北区ならびに周辺市町村も含め、潟環境研究所に期待したい。

## III. 謝辞

本稿をまとめるに当たり、多くの資料提供をいただき、さまざまな聞き取りにもご協力をいただいた豊栄土地改良区の風間 智氏に厚く御礼を申し上げます。また、聞き取り調査にこころよく対応していただいた福島潟漁業協同組合の横山辰二氏、佐藤 了氏、長谷川哲夫氏にお礼を申し上げます。



私たちが暮らす新潟は、川や堀などたくさんの水の恵みがありました。このたくさんの川や潟、堀は、田畑を潤して農作物を私たちに与えてくれました。遠くへ移動する時も、荷物を運ぶときも、舟を走らせて私たちを助けてくれました。

### 新潟に現れた龍

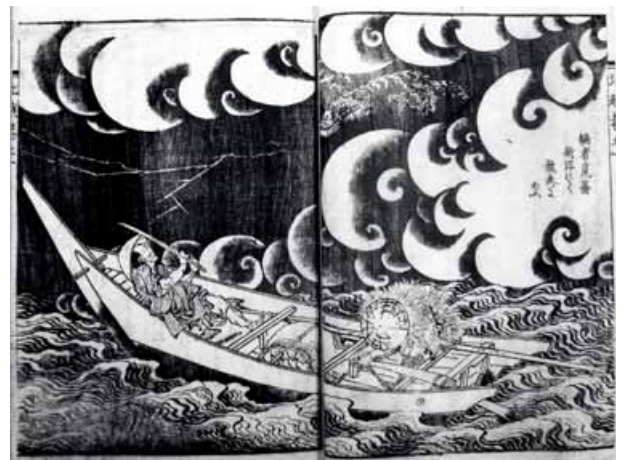
しかし、水辺には恐ろしい出来事もおこりました。文化9（1812）年に書かれた「北越奇談」には、新潟の港や信濃川に龍が現れて、水を吸い上げたり、雷を落としたり竜巻を起こしたと書かれています。龍は想像上の動物といわれていますが、蛇や鯉が長く生き、天に昇って龍になるとも考えられていました。ちょうど龍に変化するところだったのか、蛇のようなものが空中を飛んでいったという記述もあります。

### 大蛇、神となる

優しい川も時として魔物のように人々を襲うこともありました。曲がりくねった川の流れを「蛇行」と表現するように、巨大な蛇が川を作るとも考えられていました。新潟から40キロメートルほど離れた五泉市の白山という山に慈光寺というお寺があります。ここに山を荒らす大蛇がいたので、室町時代に慈光寺の傑堂能勝禅師という僧侶がお経の力で大蛇を追い出しました。大蛇は苦しみ、洪水を起こしながら能代川という川を作って海のほうへ移動しました。能代川から小阿賀野川という川を通り、信濃川を下っているうちに力を失い、白山神社の神主の夢枕に立って助けを求めました。神主は大蛇の願いを聞き入れ、現在白山神社にはこの蛇を祀った「蛇松明神」という祠があります。山を荒らしていた大蛇は、里へ下りて人々を守る存在になったのです。山から流れて来る洪水は人々には大変な災いをもたらしますが、運ばれた山の土は田畑に栄養を与えるものであったのかもしれない。



「北越奇談」似類 橋崑崙画  
(新潟県立図書館蔵)



「北越奇談」龍 葛飾北斎画  
(新潟県立図書館蔵)



「蛇頭様ご開帳」本住寺

### 本住寺の蛇頭さま

新潟の平野は湿地帯で、田もめかるんで深く、農作業が大変な場所が多くありました。そんなところでは、潟の底の土を集めて舟で田に運び入れたりしました。この作業は危険で、土を積んだ船が転覆して人が亡くなることもありました。そんな時、人々は潟の主の大きな亀が船をひっくり返したのではないかと噂しました。また、川でおぼれる人があると、河童が引きずり込んだのだと噂しました。

新潟市秋葉区小須戸の本住寺というお寺には「蛇頭さま」と呼ばれる寺宝が存在します。この地が鎌倉潟と呼ばれる湿地帯だった頃、開発しようとしても大蛇が暴れて作業ができないため、「横川浜村肝煎宗右衛門大蛇へ申入る」と大蛇に訴えました。この訴えが届いたのか、開発は無事に終わり、竜王堂を建てて弁天様を祀りました。

本住寺の蛇頭さまはこの大蛇と考えられます。大蛇に感謝し、今も一年に一度、蛇頭さまの法要を行っています。土地が開発されたのが元和6（1620）年ですから、400年近く蛇頭さまは人々から祀られていることとなります。

今は治水の技術も進み、私たちは平穏な生活を送っていますが、この足元にはたくさんの物語が刻まれています。私たちの知らない物語がまだ眠っているのかもしれない。こうしたお話を知り、犠牲になったものたちに感謝しながら、水辺の怪異を調べていきたいと思っています。

新コーナー  
だよ



郁丸 (ふみまる)

# 郁丸が探る! にいがた「潟」伝説 ①

このコーナーでは、“猫仙人” 郁丸が、にいがたの「潟伝説」をイラスト入りで紹介してくれます。さて毎回どんな伝説が飛び出すか…どうぞ楽しみに!

みんなは知っていたかな、潟にはたくさんの伝説があることを! 今回は「福島潟」にまつわる伝説を探ってきたよ。

昔、紫雲寺(現新発田市)に真野長者という長者がいて、その一人娘の「お福」がお寺の少年僧に恋をしたんだ。恋焦がれるあまりに蛇体となって少年僧を紫雲寺潟に引き込んで潟の主となったという伝説があるんだけど、紫雲寺潟は干拓されてしまった。それでお福は近くの潟に引っ越したんだ。そのためにお福の名前の福の字をとって福島潟という名になったと言われているんだよ。その後、福島潟も開墾が進んだので、お福は鳥屋野潟に引っ越した(中央大学民俗研究会「新潟県豊栄市調査報告」1983)ともいわれているよ。



お福

福島潟には予言をする妖怪の話もあるよ。潟に夜な夜な光るものが現れて、芝田というお侍さんが見に行ったら、「悪い風邪がはやるから自分の姿を描いて広めて」と言ったそうで、嘉永年間にその摺物が流行ったみたい。「海中の人」とか、「亀女」とか、摺物によってちょっと姿が変わっているんだ。

さて、今回はこの辺で。では、そろそろ次のおもしろそうな話を探りに行くか…いざさらば!



海中の人



亀女

こちらも  
新コーナー

勝手気ままに潟食文化探検!

## アンナ隊長 「潟を食べる!!!」①

このコーナーは、潟食文化探検隊(仮称)をひそかに立ち上げ、とりあえず隊長に就任した、アンナ隊長こと隅 杏奈(潟環境研究所事務局研究員)が、潟周辺地域の人々から教わった潟の食材を実際に食べてみる! という新企画。さて、初回の食材は何ですか~アンナ隊長!! はい、今回の食材は「ハス」。食べられるのはレンコンだけではないんですよ。



ハスの巻葉



ハスの地下茎

レンコンは秋から冬に養分がたまって肥大化した地下茎です。この地下茎は、実は太くなる前も食べることができるんです。佐潟周辺では「コウバイ」と呼ばれていますシャキシャキしていて、油炒めにするとおいしいそうです。



天ぷら



辛味噌炒め

6月中旬には、水面から巻葉の頭が突き出ているのを見ることができます。円形状に開く前のハスの若葉は両側から内側にかけてクルクルと丸まっています。この時期、佐潟や福島潟では、早いもので花が咲いているハスもありました。

佐潟周辺では「まくれ」、福島潟周辺では「ろーるっぱ」と呼ばれています。大きすぎず、小さすぎず、葉の長さが10センチメートルくらいのものが味が濃くて美味しいそうです。地元の人に食べ方を教わり、調理してみました。葉の根元を折って柄の部分は取り除きます。切ってみると葉が丸まっている様子がよくわかります。よく洗って、軽くゆでます。天ぷらにしたり、辛味噌炒めにしたり。苦味はなく、やわらかい葉の食感を楽しめる、季節の一品ができました。任務完了!

# 「潟」のエッセイ

## ⑤ 上堰潟は地域の宝物

本間 アユ子／新潟市立松野尾小学校長



桜と菜の花が満開の春の上堰潟



上堰潟で田舟体験する子どもたち

春には満開の桜や菜の花で彩られる上堰潟<sup>うわせきがた</sup>は、いまや多くの人々の憩いの場となっている。

一周約2キロメートルの遊歩道が整備され、「朝早くから利用者が絶えない」と、毎日のように上堰潟を見守っている地域の齋藤一雄さん（上堰潟公園を育てる会会長）から教えていただいたことがある。5～60年前の上堰潟では、田舟による稲の収穫をしたり、舟をひっくり返して泳いだりしたそうだ。

松野尾小学校では、地域の宝であるこの上堰潟を中心に地域の自然について学んだり、全校でクリーン作戦などを行ったりしてきている。これは、毎年、齋藤さんをはじめ松野尾地域コミュニティ協議会の皆さんが学習支援してくださっているおかげである。

上堰潟が海とつながっていることから、鮭の稚魚放流も始めている。27年度は、4、5、6年生と地域ボランティアの皆さんとともに、日本海区水産研究所の飯田研究員の出前授業を受け、鮭の生態や上堰潟へ遡<sup>さ</sup>上する鮭について学ぶことができた。最新の研究結果を盛り込んだ内容に聞いていた子どもたちは目を輝かせていた。

地域ボランティアの皆さんと全校児童で鮭の稚魚を放流し、子どもたちは「元気にふるさとに帰って来てほしい」と願いながら、校歌を歌ったり、鮭の稚魚の姿を追いかけていたりしていた。

地域の皆さんと連携しながら、このような豊かな体験活動を通して、松野尾小学校の子どもたちが、「地域を大事に守り続けていきたい」という思いを強くするように、特色ある教育活動を展開していく。

そのために、地域の宝である皆さんとさらにつながりを深め、私自身も学んでいきたいと思う。



子どもたちが鮭の稚魚を放流する様子

### 新潟市潟環境研究所について

本市には、地域の暮らしに根差した「里潟（さとかた）」ともいうべき個性豊かな潟が多く残っています。当研究所は、これらの潟と人とのより良い関係を探求し、潟の魅力や価値を再発見・再構築するため、平成26年4月に発足しました。

潟に関わる多くの皆さまと連携しながら、自然環境や歴史、暮らし文化などについて、調査・研究を進めています。

### 新潟市 潟のデジタル博物館

NIIGATA City Wetland Digital Museum

新潟市内に点在する湖沼「潟」に関わる資料や情報をまとめたデジタル博物館です。

URL <http://www.niigata-satokata.com/>



発行

平成28年7月

新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務局

〒951-8550

新潟市中央区学校町通1-602-1（市役所本館4階）

☎ 025-226-2072

fax 025-224-3850

e-mail [kataken@city.niigata.lg.jp](mailto:kataken@city.niigata.lg.jp)

URL <http://www.city.niigata.lg.jp/shisei/kataken/index.html>

Facebook  
ページ

